

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2894400122		
法人名	株式会社ニチイ学館		
事業所名	ニチイケアセンター豊岡の森		
所在地	兵庫県豊岡市九日市上町10番地		
自己評価作成日	平成25年5月12日	評価結果市町村受理日	平成25年7月16日

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 姫路市介護サービス第三者評価機構		
所在地	〒670-0955 姫路市安田三丁目1番地 姫路市自治福祉会館6階		
訪問調査日	平成25年6月5日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

家事(調理、掃除、洗濯、裁縫など)、菜園作業、庭掃除などの日常生活での作業において、各入居者の能力や嗜好に応じて、出来ることをとどんと頂く。それにより、充足感や達成感、役割の自負を感じて頂けるよう支援しています。
 入居されてからも、ご家族との関係が保たれるよう努めています。日々の面会支援に留まらず、日常生活における大小様々な問題について、家族の意向・意見を伺いながら、より良い支援に繋げています。また「サービス提供者」としても家族に参加して頂き、ともに支援する姿勢で取り組んでいます。

平成23年4月1日の開設から3年目を迎えた2ユニットのグループホームで、開設から2年間は各ユニットに管理者がいたが、現在は管理者を1名として業務を行い、これまでは活かされていなかった事業所理念も、管理者の指導で職員の業務の柱として活かされつつあり、同時にユニット同士の連携も取りやすくなった。また、事業所が課題にしていた入居者の外出も、運営法人の後押しにより、昨年秋には入居者全員が高原のホテルで夕食を行う事もできた。これに伴い、これからはボランティア等の社会資源確保の支援もより具体的に行われるとの事である。2ヶ月に1回の運営推進会議の開催場所が入居者のいるリビングで行われ、毎回家族も5人~7人程度のお出席もあり、入居者、家族にも開かれた会議を実践している。

・サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 該当するものに印	項目	取り組みの成果 該当するものに印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および第三者評価結果

〔セル内の改行は、(Alt+)- + (Enter+)-です。〕

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ケアプランの作成・変更時などで、支援の方向性の判断に迷ったら、理念と照らし合わせ、それに沿う支援をするよう心がけている。	職員一人ひとりが支援方法などに悩んだ時、理念に立ち返りどう支援するかを考えている。そうすることで理念が共有できつつあり、結果として職員の行動が理念に沿った支援になってきている。	職員に理念をもとに支援する事が浸透してきている。今後も引き続き理念の浸透を定着させていくことが望まれる。
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	・運営推進会議には民生委員の参加がある。 ・買い物に地域のスーパーへ行ったり花見の際には近隣のお寺にお邪魔した。	地域の溝掃除に参加したり、地域から定期的に慰問のボランティアの訪問がある。また運営推進会議などの際に地域とかかわり、利用者の外出先を作るなどの取り組みが見られた。	ニチイ学館姫路支店の協力も得て入居者の喜ぶ機会が増えるように引き続き地域との関係作りが望まれる。
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	外部へ向けての研修や周知活動は行っていない。		
4	(3)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	年6回の会議が開催でき、その都度、民生委員・保険者・家族・入居者の参加が適っている。その中で、結果の報告に対しての質疑応答、今後の計画に対しての意見を伺っている。	2ヶ月に1度定期的に会議を開催し、消防署へも参加の打診を行った。また全家族に会議参加の案内をしたり、利用者が会議に参加できるようにダイニングでオープンに行うなどの工夫が見られる。	
5	(4)	市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議には毎回地域包括支援センターの担当職員の参加がある。別途、運営上の困難事例には相談し協力を得た事もある。また、高年福祉課担当者には逐一、相談に応じて頂いている。	高年福祉課へは事故報告や介護保険の更新時などの必要時に足を運んだり、市の連絡協議会の立ち上げ会議に参加している。又、退院後の利用者の支援体制等について地域包括支援センターと連携をとっている。	
6	(5)	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束について、施錠も含めて根拠や理由を説明し、身体拘束をしないケアに努めている。	身体拘束や認知症についての研修を年に1回行うことで身体拘束をしないケアへの理解を深めるとともにケアを実践している。玄関は日中は施錠されていないが、夜間は防犯上の理由から施錠している。	
7	(6)	虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待の大きな要因が介護者の精神的な余裕の無さと考え、その点からも日勤帯の勤務者を増やすなどし、心の余裕の維持に努めている。	言葉使いも虐待につながりかねない事などを研修で伝えている。また、職員の精神的な余裕が生まれるように日勤帯の人手を増やす方法を計画し実践する予定である。	

自己	者第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(7)	権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会をもてなかったが、成年後見制度を必要とする方の入居に伴い、管理者・職員はその事について関わる事となった。	事業所の母体であるニチイ学館では制度について周知されているが、事業所ではまだ研修が始まっていない。成年後見制度の利用者が入居したため今後研修を行う予定である。	制度を利用する方が入居しておられるので制度の理解のために早いうちに研修をすることが望まれる。
9	(8)	契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約には十分に時間を取り、適宜疑問点の有無を確認しながら進めている。	事前の問い合わせ時にまず見学を勧め、利用者の不安や質問について話ができるように工夫してから契約する事に努めている。入所や退所の条件についても実例を交えて分かり易く説明している。	
10	(9)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常の支援の中で、面会や電話、FAXなどにより意見や意向を伺っている。また運営推進会議の場を利用して、外部者へも意見を求める機会としている。	家族との連絡を密にするためにFAXでやりとりすることもある。家族から外出を増やしてほしいと意見があり花見などの行事を増やした。また、母体のニチイ学館では利用者への満足度調査を行っている。	
11	(10)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ユニット会議、全体ミーティングで意見や提案を聞くと共に、日頃から随時より良い運営のための話し合いを行っている。	業務の改善についての話し合いが日常的におこなわれており日勤帯の職員の充実も職員から提案された。また、ニチイ学館姫路支店を交えた個人面談が適時行われている。	
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	社内のスキルアップ、キャリアアップシステムを使用し、条件の整備に努めている。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	社内の研修システムに則って各自社内研修を行う。また、社外研修の案内を随時掲示して、それらへの参加を促している。		
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	系列の有料老人ホームやグループホームとのやり取りが、会議や研修を通して行われており、また相互訪問もある。		

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	管理者・職員ともに、より良いサービスの提供の為、初期段階では努めて関わりを深く持ち、日常生活の中での情報収集を行っている。		
16		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人のQOL向上の為に家族からの情報や支援が欠かせないので、相談段階から信頼を得られるよう努めている。		
17		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居への相談受付時、本人の状況を確認した上で、(当)グループホームが適切なのか、他のサービスが適切なのか、見極めてお話をしている。		
18		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者同士の気遣いで支えられている場面も多々ある事に気付かされている。		
19		本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族にしか出来ない支援があるので、協力を要請したり、ケアプランにサービス主体を「家族」と盛り込む事もある。		
20	(11)	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご家族、馴染みの方との面会を大切にしている。その中で、人との関係継続が適うよう努めている。	本人、家族の同意の下で事務所から入居者の近所の人にパンフレットを渡したところ面会に来てもらう事が出来た。また、家族に近況を伝えるために写真を送るなどして関係の継続を支援している。	
21		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	状況を見て、在住のユニットに拘らず、互いのユニットへの行き来をする中で、孤立しないような取り組みをしている。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22			関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他施設への転居に際しては、転居時とその後も必要に応じて情報提供を行っている。		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(12)		思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	会話の中の言葉や、訴えに隠れている本当の願いや言葉に出来ない訴えを探る事に注意を払い、支援している。	センター方式を利用して本人、家族、親族にも記入を依頼し希望や意向の把握に努めている。また、面会時や普段の何気ない会話の中からも思いを把握するようにしている。	
24			これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居に際して、家族や関わりの深い人に、本人の生活歴、病歴、人物相関図などの記載をお願いし、把握に努めている。		
25			暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一日一日の様子を確認し、日々変わって行く入居者の心身の状態把握に努め対応している。		
26	(13)		チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	面会時の家族からの意向や日々の本人の言葉や様子を鑑みて、プランに反映している。	ユニット会議でサービス担当者会議を開催している。入居者の日々の様子や担当の職員や家族の意見などを鑑みて話し合いをおこない、その結果を介護計画に反映している。	
27			個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録もさる事ながら、日々の職員の報告や話の中に「鍵」を見つけ、手段の変更、プランの見直しに反映している。		
28			一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	新たな状況、経験の無い状況に直面するたび、自らが考えるとともに各方面にも相談しながら、適切なサービスを模索している。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29			地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	開設2年目となり、徐々に近隣の地域資源を利用し始めた段階である。		
30	(14)		かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	希望される方には協力医に月に一度の往診(健診)をして頂き、従来からのかかりつけ医を希望の方には引き続きかかりつけ医に診て頂いている。受診が必要と思われる時には提携病院への受診介助も行っている。	病院へ受診する際には受診先によっては管理者又は計画担当責任者が同行している。また、家族が受診に付き添う際には書面でのやり取りを依頼することで適切に状況が把握できるよう努めている。	
31			看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師や訪問看護師が居ない現状で、定期的な往診の他に、気になることがあれば医師に相談したり、家族に受診の相談を行っている。		
32	(15)		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院に際しての情報提供を行っている。また、退院時にも文書、口頭で情報を受けている。開設して2年が経ち、病院ソーシャルワーカーとの関わりも深くなっている。	入退院時の病院との連携を重視することを心がけており病院と密に連携が取れるようになりスムーズな入退院が実現できている。また退院時の相談を必要に応じて地域包括支援センターに行っている。	
33	(16)		重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	運営推進会議などを通して、改めてグループホームで可能なこと、不可能なことを説明しながら、重度化にいたった場合を想定したお話し、早めの対応に協力を得られるよう説明している。また、地域包括支援センターに協力を仰いだ事例もある。	重度化が見込まれる場合には特別養護老人ホームに申し込みをしてもらうことがあった。また、看護師がいなかったため医療面を含めた出来ることと出来ないことの話し合いを早い段階から行う事になっている。	
34			急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応マニュアルを作り、掲示し周知している。		
35	(17)		災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の消防・防災訓練の実施をしている。地域との協力体制は未だ適っていない。	利用者も参加する昼夜想定訓練を消防署にも働きかけて年2回行っている。実際に台風が来た時に避難経路がうまく機能するかのシュミレーションも行った。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
.その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(18)		一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	よそよそしくなく、親しみある地元の方言の中、常に尊重に欠ける言葉使いを減らせるよう努めている。	排泄確認の際などに他の入居者の前ではなく別で声をかけたり、かける声の大きさなどをTPOを踏まえているかを意識するように心がけている。近々接遇についての研修を行う予定である。	
37			利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	努めて働きかける事無く、思いや希望を言える環境である。しかし自己決定の機会を増やす事が叶えられていない。		
38			日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	大まかな一日の流れはあるが、可能な限り思いを尊重している。		
39			身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	認知症の進行やADLの低下が見られる方々には簡易な服装で混乱を防ぐなどしているが、それ以外の方は慣れ親しんだ服装を着用して頂いている。		
40	(19)		食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理は共に出来る方が殆ど居ないが、片付けは皆で分担し、洗ったり拭いたり、棚に収納したりしている。また、行事としてたこ焼きやクレープ作りなども全員参加で行っている。	入居者が片付けや調理の補助など出来る事に参加し、においや料理が出来上がる過程にも五感を使って参加できるように配慮している。また、その日のメニューを回覧板で確認するという工夫をしている。	
41			栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べる量や栄養バランスの確保は容易だが、水分摂取に拒否的な入居者が多く、ゼリーや果物の提供など工夫し水分摂取量の確保に努めている。		
42			口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	定時の口腔ケアを行い、清潔の保持に努めている。		

自己	者第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(20)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	常に失敗がある方でも、常にトイレに誘導する事に努めている。	本人の訴えを大切にして排泄の介助を行っている。トイレを使い分けることでADLに左右されずトイレでの排泄を支援する事が出来るため重度化してもパットを使わずにトイレで排泄できる入居者もいる。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	果物や乳製品の提供を努めて多くし、水分摂取量やラジオ体操の励行に配慮している。		
45	(21)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	現状の人員配置上での安全の確保のため、時間帯は限られている状況にある。しかし「今日は入りたくない」との希望には沿うよう、曜日を変更している。	入浴を拒む入居者へは、事業所内回覧板で今日は入浴の順番の日であることを意識してもらい工夫している。また、気心の知れた同性的入居者同士と一緒に入浴し、職員とともに楽しんでいる。	
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	体調に応じて適宜休憩して頂いている。安眠のため、内側からの施設も必要であれば勧めている。		
47		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の変更があった際には特に、状態変化の観察を重視すること、副作用として現れる症状の情報共有を図っている。		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事手伝い、菜園作業、趣味(裁縫や読書など)の機会を設けている。		
49	(22)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	車を使っての外出は、家族に協力を得ている状況にある(実家に帰る、なじみの店に行くなど)。近隣の散歩散策は天候を見て行っている。	昨年は事業所開設後初の入居者全員の遠足兼外食で高原のホテルへ出かけた。法人方針で買物等は複数の入居者、職員がタクシー等で出かけ、費用を法人が負担している。桜見物等の近所の外出も楽しんでいる。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50			お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	当法人の規定により、お金を入居者個人が保持する事は出来ない。		
51			電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	年賀状など、イベントでの手紙書きに留まっている。電話でのやり取りは希望者や、声かけにより可能な方へは促したりしている。		
52	(23)		居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	TVや音楽の音量が必要以上に大きくならないように努め、適っている。リビングが大きなガラス戸で外に開けているので、自然な採光が適い、四季の移り変わりが感じられる。	リビングには入居者全員が一斉に食事ができる大きなテーブルが配置され、並びに対面キッチンがあって入居者の様子を確認しながら職員は調理等ができる。天気の良い日はベランダに布団が干せ生活感がある。	
53			共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	建物の構造上、独りになれる共用空間は少ないが、和室や、キッチンの片隅など、それぞれが落ち着く場所で過ごして頂く事も多々ある。		
54	(24)		居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れたもの、馴染みの物で居室を構成できている方も居れば、必要最低限の新しい家具で構成されている方も居る。	各居室の表札は楕円の木の札に明朝体で入居者の名前が記され落ち着いた感じがあり、そこにワンポイントの絵柄が貼り付けられ「もてなし」も感じられた。また、掃除が行き届いていた。	
55			一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	手すりの多用、動線を阻害するものの排除に努めている。		